

# 障がいのある子どもの余暇支援サークル「ビークル」の 実践と課題について

## Supporting Disabled Children through Leisure Activities: Practice of and Challenges for the “Vehicle” Circle

松田 真正<sup>1</sup>・中塚 志麻<sup>2</sup>・渡邊 亮太<sup>3</sup>・橋本 正巳<sup>3</sup>

Naomasa MATSUDA・Shima NAKATSUKA・Ryota WATANABE・Masami HASHIMOTO

### Abstract

Having satisfying leisure time is essential to improve the quality of life (QOL) of disabled children. In this study, we report activities conducted in 2016 by the Leisure Support Circle “Vehicle”, which targets disabled children and is run in collaboration between a university and parents’ association in Kurashiki City. We also examined future issues for practical skill improvement and more fulfilling activities among undergraduate students learning special needs education. Regarding students’ satisfaction levels with the activities of the circle, the results revealed that students were very satisfied with day trips, but some students were not satisfied with student meetings held to conduct planning and support planning. Consequently, making student meetings more fulfilling was indicated as a future challenge.

Key words：障害のある子ども、余暇支援、レスパイトケア、学生育成

### I. はじめに

障害のある子どもたちは、自ら余暇を自己選択して取り組むことが難しく、保護者の負担も大きい。余暇活動は、QOLの構成要素として中核指標の一つであることがSchlackら（2002）に示されている。しかし、近年増加している自閉症スペクトラム症や知的障害のある子どもや成人においては余暇の乏しさが多く報告されている。

Orsmondら（2004）は自閉症スペクトラム症の10歳から21歳までの185名、22歳から47歳までの50名の子どもの母親に対して、本人の仲間関係、社会的・余暇的活動への参加に関する面接と質問紙調査を行い、全体のほぼ半数には同年代の活動をとともにする互恵的・相補的な関係がなかったことを明らかにしている。国内の報告に関しては、津上ら（2005）の調査研究によると家庭内での余暇の過ごし方として「母親と一緒にテレビやビデオをみて過ごすことが多い」こと、さらに家の外での主な過ごし方については保護者との「スーパー等買い物」や「ドライブ」が多いことなどが報告されている。以上のことから、障害のある子どもたちは積極的に考え体を動かすことなく、受動的に余暇を家族と過ごしていることが示唆された。さらに、郷間ら（2007）による調査研究においても、成人の知的障害者は余暇活動を概ね楽しんでいるものの、外出はほとんどが家族と共であり、友人や仲間との外出は少ないという結果を報告している。こうした国内外の研究報告から、彼らに対する人的資源を活用した余暇支援の必要性が高いことが窺われる。

これらの状況に対応するために、我が国ではまず、日常生活上の放課後余暇の支援を保障する制度上の取り組みが実施されている。1998年に放課後児童健全育成事業が法制化され、児童ホームヘルプサービス、児童デイサービス、児童ショートステイなどの居宅生活支援サービスも開始されている。つまり、障害のある子どもも学童保育の対象であることが公式に認められ、彼らの放課後を保障する法制度は徐々に整いつつある状況である。さらに、障害児加算や指導員の加配なども開始され、障害

<sup>1</sup> 作陽音楽短期大学 <sup>2</sup> 神戸大学保健学研究科研究員 <sup>3</sup> くらしき作陽大学

のある子どもの利用も年々増加している。しかし、泉ら（2005）の調査研究では、加配については自治体間で大きく差がみられる現状があることや、さらに指導員の配置や専門研修等による指導員育成体制、身分保障などの条件整備は不十分であり、障害のある子どもの余暇が十分に保障されているとは言えないことなどが報告されている。

このような状況を踏まえ、障害のある子どもの余暇活動を支援する目的に、くらしき作陽大学では2010年より障害のある子どもを対象とした余暇支援サークル活動「ビークル」（以下「ビークル」と称す）を開催している。

## Ⅱ．「ビークル」の活動概要

### 1. 余暇支援サークル「ビークル」の歴史と対象児について

「ビークル」は、倉敷市障害児学級親の会とくらしき作陽大学の連携により2010年に発足した活動であり、平成29年3月現在で約9年目を迎えるところである。活動開始のきっかけは、倉敷市障害児学級親の会に所属する保護者がくらしき作陽大学に対して「親の会と大学が連携して障害のある子どもの余暇活動支援を行うサークル活動を発足させたい」という内容の相談をしたことによる。また、「ビークル」とは乗り物を指す単語である。この名称の由来は、発足当初の参加児らが電車等の乗り物が好きで集まっていたことや、公共の乗り物を利用して友達や大学生と旅に行かせてやりたいという保護者の願いに由来している。

発足当初は、3名の障害のある子どもときょうだい児2名から開始されたが、2016年には12名の子どもたち（男子11名、女子1名）とそのきょうだい児13名（男子9名、女子4名）が、学生スタッフ30名と共に活動している。年齢は、小学生4名、中学生6名、高校生2名、社会人1名である。本来は、小学生から高校生の年齢を対象としているが、障害のある就労者の余暇支援先が見つからないという理由で19歳の社会人1名も所属している。障害特性については、知的障害、自閉症スペクトラム症、ADHD、ダウン症等の障害のある子どもたちが所属している。子どもたちに関わる学生スタッフは、障害特性のみならず一人一人の子どもの個性や性格を尊重することを重要視し、子どもが混乱することなくスムーズに活動に参加できるように配慮している。そのため、子どもの嫌いな物、苦手な環境や活動、好きな物、適応しやすい環境や活動等について保護者から定期的に情報を入手しながら活動している。

### 2. 活動の目的

「ビークル」は、2014年（平成26年度）から「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（文部科学省、以後 COC事業）における地域と大学が連携して実施する取り組みに参加している。COC事業は、「教育」・「研究」・「社会貢献」の大きく3つの領域に分類される。「ビークル」は倉敷市内に在住の障害児の余暇支援を本学の学生が中心になり支援することから、地域に貢献できる支援者の育成という観点から、主に「教育」の領域で活動を展開している。

「ビークル」の主たる目的は、①障害のある子どもに余暇活動の場を提供する②保護者のレスパイトケア③地域に貢献できる学生の育成である。

余暇時間にレクリエーションや旅行活動を行うことは、身体にとってストレス解消やリフレッシュ効果などのプラス面があるだけでなく、本人の行動範囲を広げ、家庭や学校、職場以外での新たな人間関係を作ることにつながり、これらのことが社会性を身に付けるのに役立つと考えられる。保護者にとっても、子どもが活動に参加している時間は、保護者同士の情報交換やリフレッシュの時間に充てることができる。また、子どもたちに関わる学生の多くは、将来的に保育士、保育教諭、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭等を目指している。つまり、学生達が「ビークル」活動を通して学んだ障害のある子どもたちの余暇支援や保護者支援は、将来的に彼らが勤務する保育・教育現場においても活かされると考える。

### 3. 「ビークル」の活動内容

#### 1) 定例会

表1、2に毎月1回実施している定例会の内容を示す。定例会は、毎月第3水曜日の夜間に行っている。定例会は、表1のように本人と学生が主体となり実施する活動と表2のように保護者が中心になり実施する活動の大きく2種類の活動に分類される。この2種類の活動を同時に、学内の隣接した別部屋で展開している。

表1に示すように19時10分からの約20分間の時間帯は、子どもたちと学生たちが一緒にレクリエーション活動を楽しむことで心と体をリラックスさせている（図1）。その後、19時30分から20時15分くらいまでの約45分間の時間帯は、子どもたちと学生たちが次回の「おでかけビークル」（年間4回休日に実施）の日帰り旅行の計画を立てる時間帯である（図2）。

次に、20時15分から実施している思い出ムービーの時間帯は、2016年10月から実施している新たな活動である。この活動は、本サークルで日帰り旅行等に出かけた際に撮影された映像を、一部の子どもが音楽付きで編集し、映像を参加者全員で楽しんで視聴する時間である。この映像の作成は、今のところ全ての子どもが経験するのではなく、パソコンや映像に興味のある一部の子どもが保護者の支援のもとに家庭においてiPadで作成している。自宅で編集されたこの映像は、編集が上手くできているかを定例会で学生と一緒にチェックして（図3）から上映することになっている。この思い出ムービーの時間帯を活動に導入することにより、思い出を友達と共有して振り返る楽しさや、思い出を映像に編集するライフスキルが身に付くと考えている。今後は、この思い出の共有には欠かせない映像編集技術をビデオカメラやパソコン等に興味のあるその他の子どもに対しても指導できないか検討中である。

表1 活動スケジュール（定例会）本人と学生の活動

|        |                                            |
|--------|--------------------------------------------|
| 19：00～ | 開会あいさつ・出欠確認                                |
| 19：10～ | レクリエーション（手遊びや体を使った遊び）                      |
| 19：30～ | 「おでかけビークル」の計画<br>（行き先の決定、電車やバスの交通集団の確認、食事） |
| 20：15～ | 思い出ムービー&おやつタイム                             |
| 20：30～ | 終わりの会                                      |
| 20：40  | 閉会あいさつ                                     |



図1 レクリエーションの様子





図2 「おでかけピークル」の計画を練る子どもと学生



図3 iPadで作成した思い出ムービーをチェックする子どもと学生

## 2) おでかけピークル

本活動では、上記のように定例会において子ども達と学生達が協力して決定した余暇計画を「おでかけピークル」で実践している。平成28年度は8月、10月、12月、平成29年2月の計4回計画・実施した。8月には、図4のようにボーリング場に行き、ボーリングを友達と楽しんだ。勝ち負けにこだわりのある自閉症スペクトラム症の子どもも、負けても「また次のゲームで勝てばいいや」と心の葛藤をコントロールする様子が見られた。また、一部の高校生は、一人で電車やバスを乗り継ぎながらボーリング場に行くことにも挑戦し、成し遂げることができた。10月には、図5に示すように電車を乗り継ぎながら岡山県北に位置する津山市の学びの鉄道館に行き、日本の社会を支えてきた歴代の鉄道を見学し、決められたお小遣いの中で考えながらお土産などを購入する経験をした。さらに、12月には、図6のように余暇における自己選択・自己決定を目標に、大型ショッピングモールにおいて自分でお気に入りの洋服や文房具を決め、自己選択のもと衣服等を購入するという貴重な経験をした。食事についても自分で残金を考えながら、好きな食べ物を友達や学生と楽しく食べる経験をした。最

後に2月には、倉敷市の大原美術館に行き、当館の学芸員の方の協力により対話式鑑賞法による絵画鑑賞を体験した（図7）。絵画に興味のある子どもが多くいることから、子どもたちは自ら学芸員に質問するなど積極的な姿勢で絵画を鑑賞していた。ある自閉症スペクトラムの子どもは、定型発達の子どものみでは気づけないミクロな視点で絵画を鑑賞している可能性があることも一緒に参加した学生が報告している。今後も大原美術館と連携し、対話式鑑賞法による美術鑑賞も障害のある子どもの余暇支援の一つの方法として有効か検討したい。



図4 第1回「おでかけピークル」（2016年8月；ボーリング）



図5 第2回「おでかけピークル」（2016年10月；津山市 学びの鉄道館）



図6 第3回「おでかけビークル」(2016年12月；大型デパートで買い物と食事)



図7 第4回「おでかけビークル」(2017年2月倉敷市大原美術館，絵画の対話式鑑賞法)

### 3) 保護者のレスパイトケア

発達障害児の保護者のストレスについて吉利ら(2009)は、発達障害児の保護者のストレスは本人に関わる側面と本人を取り巻く周囲についての2側面があり、関わりの難しさからくる本人の発達についての心配や、周囲の理解のなさへの疲労など様々な困難に直面していると述べている。このような問題から、保護者を含めた支援が必要であることはいうまでもない。

この報告を参考にして、ビークルでは①保護者の子どもの子育てに関する悩みについて②子どもを取り巻く現在の環境(学校、地域、家庭)について相談に応じることを重要視している。

表2は定例会における保護者のスケジュールを示す表である。表2に示すように、19時45分から20時30分までは①保護者の子どもに子育てに関する悩みについて②子どもを取り巻く現在の環境(学校、地域、家庭)の2つの視点で情報交換や相談に応じる時間帯を設定している。図8は、保護者と代表学生が日常の子育て等について会話している様子である。ここで相談に応じる代表学生や教職員が気をつけていることは、聴くスキルを重要視することである。問題解決に導く相談よりも、保護者の思いや悩みをなるべく自然に出していただく聴き方をするようにしている。つまり、カウンセリングマインドを重要視している。また保護者が解決したい悩みについても、保護者同士のつながりを重要視



し、悩まれている保護者と同様の経験をされている保護者にも相談に応じていただくように配慮している。

表2 活動スケジュール（定例会）保護者・学生代表・教職員の活動

|        |                                |
|--------|--------------------------------|
| 19：00～ | 開会あいさつ・出欠確認                    |
| 19：05～ | 次回の「おでかけビークル」の話し合い ビークルの運営上の相談 |
| 19：45～ | 保護者同士の子育ての情報交換、子育て相談           |
| 20：40  | 閉会あいさつ                         |



図8 保護者と子育てについて話し合う代表学生

### Ⅲ. 学生の満足度調査

本活動を発展させる目的で2017年2月に学生に対する満足度に関する質問紙調査を実施した。調査日は2017年2月25日であった。調査対象は、本活動に参加する19歳から24歳までの33名の学生（男子8名；女子25名）であった。質問紙は、余暇支援サークル「ビークル」活動に関しての3問から構成されるものを使用した。回答方法は、「大変満足」「満足」「どちらともいえない」「やや不満」「不満」の5件法であった。

質問の内容については、質問1「ビークルの定例会活動についてどのように感じていますか？」質問2「ビークルのおでかけ活動についてどのように感じていますか？」質問3「ビークルの学生ミーティングについてどのように感じていますか？」という内容であった。また、回答理由についても自由記述式で記入できるよう設定した。

その結果、図9に示すように、質問1、2については、「たいへん満足」が17名（51.5%）と答えており、「満足」と答えた者は16名（48.5%）であった。つまり、33名全員が「満足」以上と回答しており、「ビークル」活動における定例会やおでかけに対しての学生の満足度は高いことが理解できた。次に質問3については、「たいへん満足」が7名（21.2%）、「満足」が17名（51.5%）、「どちらともいえない」が9名（27.3%）であり、「満足」以上と感じている学生は24名（72.7%）であった。この結果から、本活動の計画や子どもの共通理解を図る上で欠かせない学生ミーティングについても約7割の学生が満足感を示していることが理解できた。「どちらともいえない」と回答した約3割の学生の理由に関する自由記述欄に注目すると、「ミーティングの際に、子どもの特性理解と支援方法などについてもっと助言が欲しい」「時間配分を工夫してほしい（時間を延長することが多い）」などの記述内容が散見された。このことから、活動中の子どもの特性理解と支援方法に関する疑問については、ミー

ティング時間外においても必要に応じて専門の教職員に相談できる体制の構築が必要であると思われる。また、時間配分の改善については、ミーティングを開催する代表学生が当日のミーティング内容の時間配分を事前に教職員に相談しながら要項を作成・活用し、限られた時間内で計画的にミーティングを進めていくなどの改善が必要なのかもしれない。いずれにせよ、学生に対する教職員のサポートがあれば、改善可能であることが推測される。

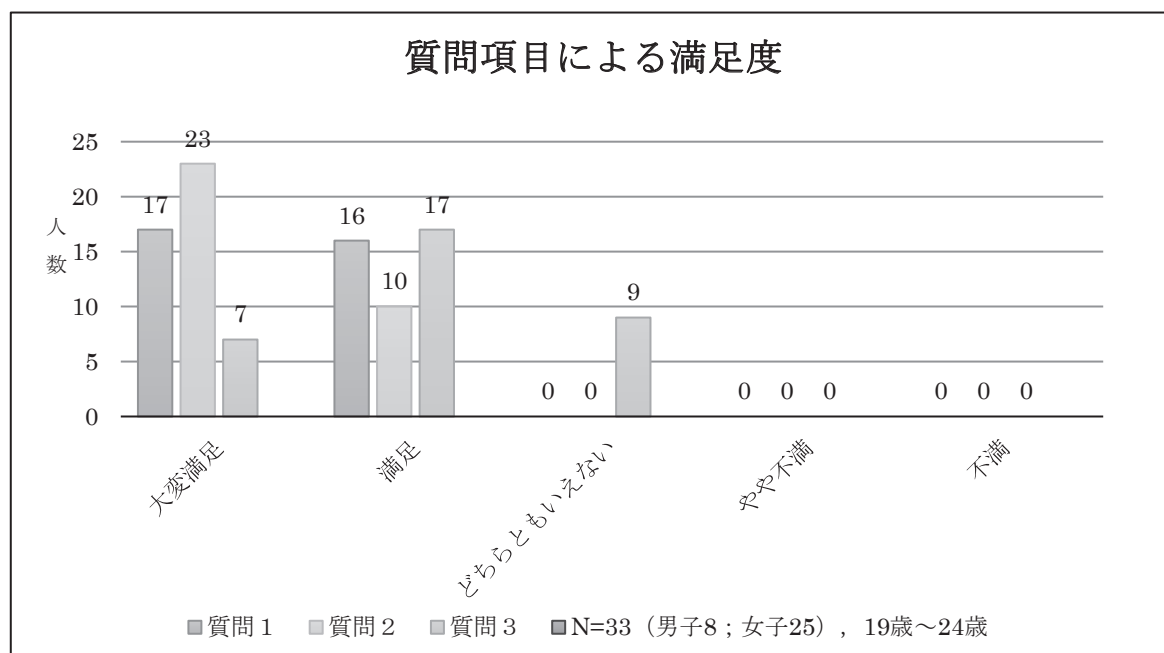


図9. 余暇支援サークル「ビークル」活動に対する学生の満足度

#### IV. まとめ及び課題

文部科学省（2015）は、「特別支援教育の現状と課題」において、平成15年5月1日現在と平成25年5月1日現在の過去の特別な支援教育対象の児童生徒数を比較している。その結果は、特別支援学校在籍児童生徒数は10年間で1.3倍に、小・中学校の特別支援学級在籍児童生徒数は10年間で2.0倍に、小・中学校の通常学級に在籍しながら通級指導教室を利用する児童生徒は10年間で2.3倍にそれぞれ増加している。これらの結果は、保育園、認定こども園、幼稚園等の就学前の保育教育現場においても同様に、特別な支援が必要な子どもが増加していることを示している。つまり、現在の保育教育現場で働く者には、障害のある子どもの個々の特性やニーズに応じた支援を実践できることは必要不可欠なスキルである。

「ビークル」活動に参加している9割以上の学生は、将来的に保育士、保育教諭、幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭等を目指す学生である。彼らは、本活動を通して、障害のある子どもたちの一人一人のニーズに応じた日常生活支援や心の援助及び保護者支援など多くのことを学んでいる。将来的に本活動に関わる学生達が、地元倉敷市をはじめとする多くの地域の保育・教育現場で、本活動からの五感を通じた学びを活かしながら支援者として活躍してくれることを期待している。先にも言及したとおり、「ビークル」は2014年（平成26年度）から「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（文部科学省、以後 COC事業）に参画している。地域に貢献できる支援者の育成という観点から、主に「教育」の領域で活動を展開している。その「教育」の領域としての役割を「ビークル」が十分に果たしているか否かについては、今後もさらに保護者のニーズ調査や満足度調査を実施しながら詳細に検証していく必要があると考える。また、「ビークル」を充実させるためには、学生主体で行う事前のミーティング（子どもの行動特性の分析や支援計画）や教材づくり等準備の時間帯の充実が必要不可欠である。今回の学生への質問紙調査結果からは、この部分に関しては不十分であるこ



とが示されたので、教職員がサポートしながら改善していく必要がある。

## 参考文献

1. Orsmond,G.I., Krauss.M.W.,Seltzer,M.M., (2004) Peer Relationships and Social and Recreational Activities Among Adolescents and Adults with Autism. Journal of Autism and Developmental Disorders, Vol 34, 3, 245-256
2. 郷間英世・藤川聡・所久雄 (2007)「知的障害者の余暇活動についての調査研究」『奈良教育大学紀要』人文・社会科学 56巻, 1号, 67-70頁.
3. 今津芳恵・佐藤倫子・荻野佳代子・米倉康江・坂爪一幸 (2007)「自閉症児の親のストレスならびに支援ニーズの把握に関する研究Ⅰ」『日本教育心理学会発表論文集』49巻, 728頁.
4. 今津芳恵・佐藤倫子・米倉康江・荻野佳代子・山口幸一郎・坂爪一幸 (2009)「自閉症児の親のストレスならびに支援ニーズの把握に関する研究Ⅲ：支援機関利用の実態及び満足度調査より」『日本教育心理学会発表論文集』51巻, 405頁.
5. 泉宗孝・小池将文・八重樫牧子 (2005)「岡山県における障害児の放課後生活実態調査に基づく放課後生活保障に関するニーズ調査」『川崎医療福祉学会誌』15巻, 第1号, 43-56頁.
6. 黒山竜太・高島恭子・豊島律 (2011)「自閉症児の余暇活動における保護者の支援ニーズに関する研究」『長崎国際大学論叢』11巻, 67-73頁
7. 文部科学省 (2015)「特別支援教育の現状と課題」『教育課程企画特別部会資料』1-40頁.
8. Schalock, R.L (2002) Quality life its conceptualization, measurement, and application.『発達障害研究』24巻, 87-120頁.
9. 津上正敏・立田幸代子 (2005)「障害児・家族の生活実態と地域生活支援」『障害者問題研究』32巻, 4号, 285-292頁.
10. 山本佳代子 (2012)「障害のある子どもへの余暇活動支援「チャレンジ」の実際とその課題」『西南女学院大学紀要』16巻, 77-83頁.
11. 吉利宗久・林幹士・大谷育実・来見桂典 (2009)「発達障害のある子どもの保護者に対する支援の動向と実践的課題」『岡山大学大学院教育学研究科研究収録』141巻, 1-9頁.

